



～児童交流 50 周年～

大阪の羽曳野市立白鳥小学校との交流が、本年度で 50 年を迎えました。県内で学校同士が 50 年にわたる交流を続けているという話は聞いたことがなく、非常に貴重な取組であると思います。

両校の交流は、「赤江の子は「井の中の蛙」ではあってならない。広くいろいろなものと交流していくべきではなかろうか」

という赤江小の保護者の思いに、白鳥小が共感できると応じ、昭和 48 年に白鳥小の児童が赤江を訪れて実現しました。以来、交流は少しずつ形を変えながら今に至り、その間、両校は姉妹校縁組をしてより強い絆で結ばれました。多くの方から心温まる交流の思い出をお聞きします。この交流が、子どもたちや保護者の皆様にとって深く心に刻まれる貴重な体験となっていることがうかがえます。ここに至るまでの赤江小、白鳥小、双方の関係の皆様のご尽力に心から敬意を表したいと思います。

家庭や地域社会の変化、個々の教育ニーズの多様化、グローバル化、ICT活用教育の促進、さらにコロナ禍と、両校を取り巻く教育環境は大きく変化しています。目まぐるしく情勢が変化する激動の時代ですが、こんな時代だからこそ児童交流の意義と大切さがあると思います。学校評議員会やPTA運営委員会でご意見をいただきながら、現在、両校で今後の児童交流の在り方を考えています。これからも両校の絆を大切に、交流の灯をともし続けていきたいと思っています。

児童交流 50 周年記念式典（6 月 17 日）

6 月 17 日（金）、赤江地区教育後援会長 遠藤 孝 様を来賓に迎え、記念式典が開催されました。式典には、PTA 役員の皆様、6 年生、教職員が参加し、白鳥小学校からは 黒木 悟 校長先生がリモートで参加されました。開催に至るまでの田中崇如 委員長を中心とする実行委員会の皆様のご尽力に感謝申し上げます。

式典は、遠藤教育後援会長、二岡 PTA 会長、田中実行委員長、両校の校長のあいさつのほか、実行委員会が準備したこれまでの児童交流を振り返る画像や、昨年度の学習発表会で披露した「銭太鼓」の様子をスクリーンで視聴しました。今年度、実行委員会編集された 50 周年記念誌が発刊される予定です。

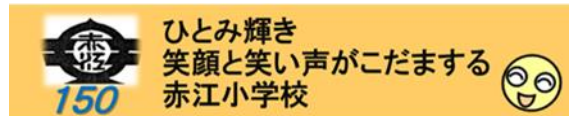


児童交流旗の掲揚で式が始まりました。6 年生が児童代表として参加しました。



白鳥小の黒木 悟校長先生はリモートで参加されました。田中崇如実行委員長の挨拶の様子です。
今回の「開校 150 年記念コーナー」は、白鳥小学校との児童交流に関することです。

「白鳥小学校との交流のはじまり」



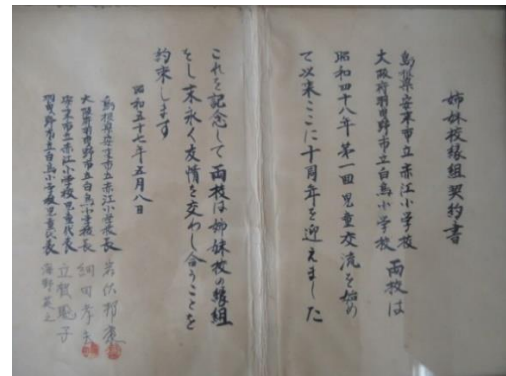
昭和 47 年赤江小 P T A 役員会の席で「PTA の役割は環境整備だけでは駄目である。子どもたちの教育に

直接かかわろうではないか。赤江の子は井の中の蛙であってはならない。広くいろいろなものと交流していく時代ではなかろうか。」との提案があり、「都会の子どもと農村の子どもが交流すればよりいろいろなことが勉強できる。学校教育では学ぶことができない体験ができるのではないか。」といった話にまとまりました。

早速、当時の小笹 PTA 会長、大江副会長、足立校長が、市 P 連研修会の講演講師で赤屋に滞在しておられた元大阪教育大学教授の村田先生のもとを訪問し、都会の小学校との交流の仲介をお願いされました。この提案は、村田先生の大学でのゼミに参加していた白鳥小の先生を通して、白鳥小の佐藤校長に届くこととなります。白鳥小では、「臨海学校か林間学校を行いたくまじさや、協調性、忍耐力、実践力といったバイタリティある子どもを育てたい」と考えており、この提案に共感できるところがあつたため、教職員、PTA 役員会で検討を重ね、交流相手として手を挙げられたそうです。

当時の赤江小の足立校長先生は「自分としては、責任問題、衛生面、教育委員会の規則、予算等受け入れに関して不安があり、時期尚早と思っていたが、PTA 役員のアマリの熱意に心打たれ、やってみよう」と決心した。」とあります。そして、昭和 48 年の夏、白鳥小の 6 年生たちが赤江の地を訪れ、以降 50 年にわたる児童交流が始まりました。

当時の両校の子どもたちの教育にかける熱い思いが伝わってくるエピソードです。



昭和 57 年には、白鳥小学校にて、赤江小と白鳥小の間で姉妹校縁組の契約が交わされました。

